

## 0. 本稿の目的

8世紀までに記録された朝鮮半島地名には日本語と類似した語形を持つ「大陸倭語」の層が見られるが、これらは日琉語族と同系言語である濊人の言語であると考えられる。8世紀濊語と平安アクセントの間には語の高起・低起に関して類似した特徴を有する可能性があることを論ずる。

## 1. 朝鮮半島の歴史的な言語状況

伊藤 (2020: 87) に整理したように、河野六郎博士は朝鮮半島の言語について下記のような見解を示している。本発表もこの前提に立って議論を進める：

- ①朝鮮語の系統、日本語との系統的関係は不明である。
- ②アルタイ語族仮説に対してはその可能性を認めつつも常に懐疑的である。
- ③朝鮮語は辰韓の斯慮語（韓語<sup>1</sup>）>新羅語の系統を引く言語である。
- ④3世紀の朝鮮半島には倭語を含む、後の朝鮮語とは系統を異にする諸言語<sup>2</sup>が話されていた。

## 2. 「高句麗地名」の言語

『三国史記』「地理志」所載「高句麗地名」は二重表記のないものも含めて総計 197 地名が確認される。こうした二重表記から「七重：難隠別 \*nanənper LHL LHH (cf.日本語 ナナへ甲>ナナへ LLH) のように日本語と類似した語形が確認される。

何よりも重要なことは、①これらの地名が後述するような音借字及び訓借字による「二重表記」によって、②757年に、③新羅の官吏によって記されたという事実である。新羅の主要民族は韓語話者だったが、当時「靺鞨国民」と称された濊語話者も統一新羅を構成する民族であった。8世紀統一新羅と同時期の律令日本では、漢字の音訓を利用して固有名詞を宛字表記する習慣が存在した。日本の場合「加茂=鴨 kamo」などがそれだが、これは日本語話者が自言語の漢字の音訓を利用して表記したものである。同様に「高句麗地名」を含む韓語地名にも「波旦=海 \*pater」「伐=火・城 \*per」「密=推 \*mir」などの韓語による音訓二重表記が見られる。これらの表記は、普通に考えれば、それぞれ、日本語話者或いは韓語話者で漢字を操る者の手になる表記であるとしか考えられない。「高句麗地名」に日本語に類似する語が含まれることは、日本語に類似した言語がかつて朝鮮半島に存在した事実の反映と看做すことができ、Janhunen(2003)や Vovin(2017)を始めとする近年の諸研究もこれらを Peninsular-Japonic 等の呼称で呼んでいる。伊藤英人(2019)では暫定的に「大陸倭語」の仮称を用いた。

「高句麗地名」についての諸先行研究については伊藤英人(2019)で述べたのでここに繰り返さないが、

<sup>1</sup> 「8世紀新羅韓語」「百済民衆韓語」「15世紀ソウル韓語」のような下位名称を使用する。

<sup>2</sup> これらのうち、日本語と類似する言語要素は濊人の言語であるという「濊倭同系説」が河野(1993)で提出された。根拠として15世紀韓語の「倭」の訓が *iaiR* であり、これは同時に「濊」の字音である事実を挙げた。

一部の研究を除いて「高句麗地名」は「高句麗語」で名付けられた地名であるとの前提に立っている。しかし、樂浪郡では BC1 世紀には「現地出身者」が漢字を使用していた出土資料が確認される。樂浪郡の「現地」人はつまり、韓語もしくは濊語話者以外ではあり得ない。両漢に反抗と服従を繰り返していた「高句麗人」の主要勢力はまだ、鴨緑江以北にあった。「高句麗地名」が「高句麗語」であるという前提は、5 世紀以降、南下し、朝鮮半島中部以北を領有した高句麗語話者が、海浜から幽谷に至る地名を「高句麗語で命名し直し」て廻り、それを漢字表記したという前提に立った行論である。しかし、地名とは先住民の名づけ<sup>3</sup>を踏襲するものである。

### 3. 濊人と濊語

BC11 世紀から統一新羅時代にかけて、朝鮮半島において、韓語話者集団とともに、濊語話者集団の活動が確認される。濊人は中国沿海から東渡した海民・内陸水系民として漁撈、狩猟の加工品の中国市場への流通に関わる一方、水田農民として、鴨緑江以北から朝鮮半島最南端に至る全域で活動していた。BC1 世紀には、樂浪郡の現地語話者である韓語、濊語話者の中には、漢字と中国語を非母語として習得する者が現れ、3 世紀から 4 世紀初頭の魏晋代には、江原道の濊人は、「濊貊」を「東濊」と改めるほどに漢字文化と華夷意識を内面化していた。3 世紀の同時代資料である『魏書』「烏丸鮮卑東夷伝」「韓条」には、京畿道利川、全羅北道高敞に濊語地名が確認され、414 年の「広開土王碑文」にも、ソウル以南の西海岸に韓濊混住地域の存在した記載がある。羅道南部の馬韓残余勢力圏及び伽耶地域の濊人はその海民的性格により、朝鮮半島諸国と倭国内の諸勢力を結びつける海上交通に深く関与した。朝鮮半島の鉄資源確保が倭国内での王権維持に死活的に重要であったため、倭国勢力と朝鮮半島の濊人は 7 世紀後半に至るまで、通訳を介さず相互に頻繁に往来した。

### 4. 大陸倭語の「高句麗地名」の地理的分布

伊藤英人(2019d, 2020)は「高句麗地名」の分析を通して「古代韓語」及び「大陸倭語」が朝鮮半島中部以北全体に分布していることを明らかにした。

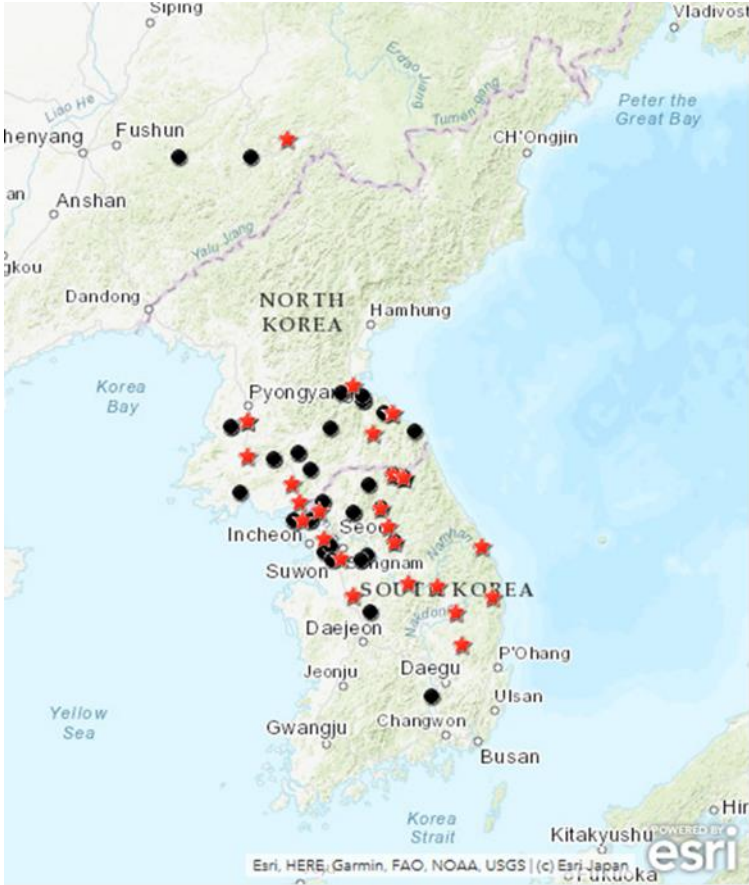
---

<sup>3</sup> 5 世紀以降朝鮮半島を南下した高句麗語集団より遥か以前から朝鮮半島に居住し、紀元前 1 世紀から漢字のリテラシーを有していた樂浪系韓・濊人の表記を踏襲したと考えられる。

下図の説明：●大陸倭語 ☆古代韓語

鴨緑江以北の三地点は否定地不明であり、地点は意味を持たない。

最南の●は新羅地名である。



757年の地名改正による「高句麗地名」中の日本語に類似した音訓表記は濊語のそれによると考えられる。8世紀濊語漢字表記の語、及び6世紀出土資料の濊語「島：sjema」と「邑：\*mura」をこれに加えた地図は以下の通りである。

下図の説明

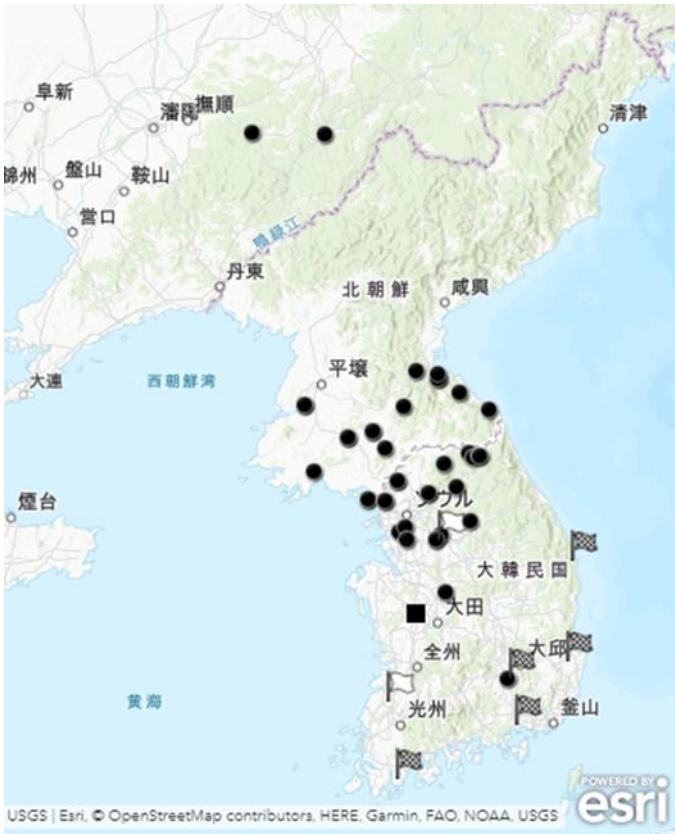
● 『三国史記』濊語地名（最南の●は新羅地名）

🚩 「東夷伝」の「牟盧」（邑：\*mura）

🚩 「牟羅」（邑：\*mura）

■ 「斯麻」（島：sjema）

鴨緑江以北は比定地不明で、地点は意味を持たない。



## 5. 8世紀濊語再建形と平安アクセント

伊藤英人(2021)では、漢字表記された地名の語を、平声に始まる「平起語」と上去入に始まる「仄起語」に分けてそれらを平安アクセントの高起語・低起語と比較した。

これら濊語地名に現れる語を、平声に始まる「平起語」と、上去入声に始まる「仄起語」に分けて、日本語平安アクセントと比較すると、「濊語平起語が平安アクセント L 始まりの語に対応する例」として「五：\*ytʃ」平去/LL、「七重：\*nanənpər」平上入/LLH、「兔：\*usjegam」平平平/LHH、「心：\*kər」平-/LLH 及び「木：\*ker」平（～入）/L、「谷：\*tən」平/LL、「島：\*sjema」平平/LL の 7 語が、「濊語仄起語が平安アクセント H 始まりの語に対応する例」として、「水：\*me」上/H-、「鉛：\*namur」上入/HHL（～LHL）、「三：\*mir」入/HL、「口：\*kurtʃi～\*kutʃi」入去～上去/HH、「十：\*tək」入/H、「穴：\*kapi」入上～入/HH（峽）、「邑：\*mura」上平/HL の 7 語が、「濊語表記の平仄と平安アクセントの対応が上述諸単語と異なるもの」として「入：\*i」平/HL、「深：\*puk-」入/LLF（深し）「蒜：\*mer」上-/LL-（薤根草）、「首：\*tʃinjak」

去入/LL (角)「池：\*nami」去上/LL (波)、「谷：\*tan」去/LL の6語が認められる。

古韓音再建調値<sup>4</sup>及び韓国伝来字音の調値<sup>5</sup>の形で比較すると以下の通りである。

- ・古韓音・伝来字音ともに平安アクセントの高起・低起と一致する例<sup>6</sup>

「五：于次」\*yŏ LH イツ->イツ-LL、「七重：難隠別」\*nanənper LHL~LHH ナナへ甲>ナナへ LLH、  
「兎：烏斯含」\*usjegam LLL ヲサギ甲~ウサギ甲>ウサギ LHH、「心：居尸」\*kər L コ乙コ乙ロ乙>コ  
コロ LLH、「木：斤尸」\*ker L コ乙~キ乙>キ L、「谷：吞」\*tən L タニ>タニ LL

- ・古韓音・伝来字音のどちらかが平安アクセントの高起・低起と一致する例

「木：肸」\*ker L~H コ乙~キ乙>キ L、「三：密」\*mir L~H ミ甲ツ>ミツ HL、「水・川・井：買」  
\*me L~H ミ甲->ミ-H、「鉛：乃勿」\*namur HL~RH ナマリ>ナマリ HHL、  
「口：忽次」\*kurŋi LH~HH クチ>クチ HH、「口：古次」\*kufi HH~RH クチ>クチ HH、「十：  
徳」\*tək L~H ト乙->ト-H、「穴：甲比」\*kapi LH~HR カヒ甲>カヒ HH、「深：伏」\*puk-L~H フ  
カシ>フカシ LLF

- ・古韓音・伝来字音いずれも平安アクセントの高起・低起と一致しない例

「谷：旦」\*tan H タニ>タニ LL、「谷：頓」\*tən H タニ>タニ LL、「入：伊」\*i- H イル>イル  
HL、「蒜：買尸」\*mer H~R ミ甲ラ>ミラ LL「薤」、「首：次若」\*tjinjak HL~HH ツノ>ツノ LL  
「角」、「池：内米」\*nami HH~HR ナミ甲>ナミ LL

6世紀出土資料等に現れる次の2語は古韓音・伝来字音ともに平安アクセントの高起・低起と一致する例である。

「斯麻：島」\*sjεma LL シマ>シマ LL<sup>7</sup>、「牟羅：村」\*mura HL ムラ>ムラ HL

## 6. 濊倭語の系統的分岐と韓語との相互影響について

6~8世紀濊語と古代日本語が何らかの系統的關係にある可能性が考えられることから、筆者は「濊倭祖語—大陸濊倭語（濊語派）—8世紀濊語—10世紀頃消滅」「濊倭祖語—列島濊倭語（倭語派）—日本語・琉球語・八丈語(?)」の系統的分岐<sup>8</sup>を措定する。出土資料及び『日本書紀』地名の「牟羅」、『魏書』「烏丸鮮卑東夷伝韓条」地名の「牟盧」、及び出土資料の「斯麻」の分布から見て、濊語は慶尚道、全羅道を含む朝鮮半島全域で3世紀以来韓語と共に話されていたと考えられる。\*sima > \*sjεma の変化から見て、濊語派は6世紀までに breaking of \*i を経験し、倭語派はそれを知らない時期に分岐したと考えられる。濊倭語族は朝鮮半島において韓語の影響により韓語化<sup>9</sup>を経験したと考えられ、一方、現代に残る慶尚道方言、江原道三陟・江陵・寧越方言の「声調」等は日本海側に優勢であった濊語の影響による「地域特徴」であると考えられる。濊語は遅くとも殷代までに朝鮮半島に東渡し、韓語話者集団と接触する

<sup>4</sup> 古韓音再建調値は森博通(2003)による。

<sup>5</sup> 伝来字音上去声の調値はより古く優勢な調値に従う。

<sup>6</sup> 「訓表記：音表記」\*再建形 再建声調（両者が異なる場合は「古韓音~伝来字音」のように示す）上古語>平安語 平安アクセントの順に示す。濊語と日本語の語義に差がある場合は末尾括弧内に比較される語を漢字表記する。

<sup>7</sup> シマはシメ乙 LL（標）と共にシム LF の情態言と見られる。6世紀濊語\*sjεma LL は古代韓語に借用され、\*achəm（朝）、\*perkei（蟲）等と同様に LL>LH の変化を15世紀までに経験し、\*sjεma LL>\*sjεma LH >sjε:m R となった。

<sup>8</sup> 日本列島内部での階層關係は本稿の範囲外である。

<sup>9</sup> 孤立語型から膠着型への変化、連体形・動名詞の成立、形容詞の用言化などである。

中で、濊倭語の韓語化が生じ、その後、BC900～700 年頃に水田農耕を携えて日本列島に渡った倭語派集団が列島に拡散したものと考えられる。濊倭語集団の朝鮮半島から日本列島への渡来は累次に及び、3 世紀までには九州、四国、本州西部は列島濊倭語すなわち倭語がコイネーとなる広大な地域になっていたと考えられる。歴史時代以降も、特に伽耶、馬韓残余勢力圏の濊語話者と列島の倭語話者は7世紀後半まで頻繁に行き来し、これにより両言語間の *mutual intelligibility* も一定程度保たれたものと考えられる。倭王権が常に海民(濊人)による朝鮮半島資源確保を最優先してきたことと関連すると思われる。

濊の中心地だった半島東海岸の慶尚道方言には、現代ソウル韓語と比べて以下のような孤立語的性格が見られる。①15世紀韓語に部分的に見られるが慶尚道方言に遥かに優勢な用言語根の直接結合(例: *kkir-an*-引き-抱く、*ti-ka*-入って-行く、*tir-noh*-入れ-置く、*tir-anc*-入って-座る、*tir-o*-入って-来る、*ir-na*-起き-立つ<sup>10</sup>)、②15世紀韓語にも見られる、繫辞を介さず名詞に直に付けられる疑問助詞の残存(例: *iki ni chek ka?* (これ お前の 本 か))、③現代ソウル韓語にも15世紀韓語にも見られない、接辞の母音調和による交替形の不在、すなわち実施起源文法要素の独立性の強さ(例: *pap mu(k)-ass-na?* <sup>11</sup>飯 食べ-た-か)、等である。

Janhunen(2003)が作業仮説として提示した①Pre-Proto-Japonic came from Coastal China.②

Japonic had originally a non-Altaic typology.③Japonic had once a Sinitic typology.について、就中②③は日韓語の類型論的考察を通して闡明されるべきである。本報告で未言及の「三国地名」『記紀』及び出土資料の固有名詞の検討も今後の課題である。

## 参考文献

- 伊藤英人(2019)『高句麗地名』中の倭語と韓語『専修人文論集』105号、:365-421、川崎
- 伊藤英人(2020)「古代朝鮮半島諸言語に関する河野六郎説の整理と濊倭同系の可能性」長田俊樹編(2020)『日本語「起源」論の歴史と展望』:日本語の起源はどのように論じられてきたか』三省堂、東京:83-125
- 伊藤英人(2021)「濊倭同系論」『KOTONOHA』224号、古代文字資料館、<http://kodaimoji.her.jp/pdf15/yitou224.pdf>
- Janhunen (2003)A Framework for the Study of Japanese Language Origins, <http://publications.nichibun.ac.jp/region/d/NSH/series/niso/2003-12-26-1/s001/s025/pdf/article.pdf>,最終閲覧日:2021年1月23日
- 河野六郎(1993)「三国志に記された東アジアの言語および民族に関する基礎的研究」平成2・3・4年度科学研究費補助金一般研究(B)研究成果報告書、東洋文庫
- 森博達(2003)「稲荷山鉄剣銘とアクセント」小川良祐・狩野久・吉村武彦編(2003)『ワカタケルとその時代: 埼玉稲荷山古墳』山川出版社:152-162、東京
- Vovin,A.(2017) Origins of Japanese Language, Oxford Research Encyclopedia of Linguistics,<http://linguistics.oxfordre.com>,online publication date:sep.2017,最終閲覧日:2018年9月15日

<sup>10</sup> 現代ソウル韓語ではいずれも *converb* 形を介し、これらの語根結合は15世紀韓語にも見られない。

<sup>11</sup> 女性母音語幹 *muk-* (食べる)に続く過去接辞が男性母音形 *-ass-*を取る。ソウル方言では *mək-*の後では *-ass-*でなく、*-əss-*という女性母音形に交替する。